



Title	雲南回民の移住とトランスナショナリズムに関する文化人類学的研究
Author(s)	木村, 自
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47180">https://hdl.handle.net/11094/47180</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	木村 自
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第 20814 号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間学専攻
学位論文名	雲南回民の移住とトランスナショナリズムに関する文化人類学的研究
論文審査委員	(主査) 教授 栗本 英世 (副査) 教授 小泉 潤二 教授 春日 直樹 教授 中川 敏

#### 論文内容の要旨

本論文は、19 世紀末から 20 世紀中旬までの間に、雲南省からビルマやタイに移住し、さらに台湾に再移住した雲南回民のトランスナショナルな社会空間を、台湾に居住する雲南回民を中心にして分析したものである。

まず第 1 章においては、今日の移民研究がもつ可能性の一つをトランスナショナリズム研究に指定し、今後発展させるべき課題として、次の 4 点を指摘した。すなわち、第 1 に、トランスナショナリズム論のもつ「トランスネーション」の本質化をどのように避けるかという課題である。トランスナショナリズム論は、ディアスポラ論などと同じく、各地に離散して生活する人々を一つのネーションとして本質化してしまう危険性がある。トランスナショナリズム論においては、そうした危険性を避ける方途を考える必要がある。第 2 に、トランスナショナリズム論が指摘する多元的な帰属意識、多元的なネットワークとは何かという課題である。今日のトランスナショナリズムは多元的な帰属意識を迫るべきであるという考え方があり、筆者もそれに基本的に同意するが、それでは多元的な帰属意識はどのように理解されるべきなのかは問題とせねばならない。第 3 に、1990 年以降的な現象としてのトランスナショナリズム論を、歴史的な文脈のなかに位置づけるべきであるという主張である。第 4 に、宗教とトランスナショナリズム論との関係をどのように理論化できるかという課題である。宗教性はエスニックなカテゴリーとはいつも重なるとは限らず、両者のズレが見られることも多い。トランスナショナルな社会空間においても、そうしたずれに注目することが重要である。

第 2 章においては、本論が分析の対象とする雲南回民について、その歴史的背景を紹介すると同時に、これまで雲南国民の移住を対象に論じられてきた研究と、人類学的トランスナショナリズム論とがどのように接合できるのかを議論した。雲南回民の移住について論じた従来の研究成果においては、トランスナショナルなネットワークや、ローカルなコミュニティにおけるトランスエスニックな関係性、多元的な帰属意識の問題など、今日の人類学における移民研究に通底する課題が論じられている。しかし、個別の地域史的な報告に終始しており、人類学的理論とクロスオーバーさせることができていないと指摘した。

第 3 章においては、台湾回民エリートの語りを分析することで、台湾回民のエスニシティと宗教について論じた。今日の中国においては、中国ムスリムは「回族」という名称を付与されて少数民族として規定されている。しかし、国民党政権下の中華民国においては、中国ムスリムは宗教集団にすぎず、民族集団ではないとされ、台湾回民自身もそうした認識を受け入れていた。一方で議会内には、女性や職業集団と並んで議席数が与えられてきた。いわばエス

ニック・マイノリティではないマイノリティとして規定されてきたわけである。こうした状態は、国民党政権が国共内戦に破れ台湾へと撤退して以降も続いていた。国民党政権側は、中東イスラーム諸国との外交関係を維持するため、台湾回民を積極的に利用した。しかし、外交上中東イスラーム諸国との関係が重要でなくなると、議会定数などの台湾回民に対するマイノリティとしての保護条項が軽んじられるようになった。既得権益の危機に直面した台湾同氏エリートは、エスニック・マイノリティとしての回民という生残を前面にだすようになる。大多数の台湾回民がイスラーム教を信仰する漢人であるというアイデンティティを有している状況を考えれば、回民エリートが戦略的にエスニック・マイノリティとしての自己主張をすることが、台湾回民社会にどのような影響を与えるのかを注視する必要がある。

第4章は、台湾へと移住した雲南回民のライフ・ヒストリーをもとに、トランスナショナリズムにおける多元的な帰属意識とは何かを論じた。とくに、帰属意識における国家との距離を問題にすることで、トランスナショナリズム論が前提としてきた国民国家と移民との関係を相対化することを試みた。具体的には、ライフ・ヒストリーでの語りから、越境感覚、居住地域における身分証明書の取得問題、「帰国」に対する感覚の3点を取り上げ、雲南回民が国家をどのように理解しているのかを分析した。そこから理解できたのは第1に、20世紀半ばに雲南省を離れビルマやタイに移住した雲南回民は、居住地域の国家に対する帰属意識を欠いていることである。第2に、とくにビルマにおいては国民としての身分証明書の取得が逆に国家と移民との距離を広げてしまっていることである。第3に、とくにビルマから台湾への移住者は、台湾への移住について「帰国」という感覚を抱いているが、その帰国を促したのはビルマと台湾との間にトランスナショナルな社会空間を構築することが可能となったからであった。

第5章で論じたのは、トランスナショナリズムにおけるローカルな社会関係の重要性である。移民は移住先地域において、既存の社会関係から独立して存在するのではなく、そこに組み込まれながら生活する。雲南回民は台湾に移住後、既存の清真寺や中国回教協会などのローカルな社会組織と関係を結びながら宗教生活を営む。雲南回民のローカリティは、そうした既存の社会との関係性をとおして産出される。ここでいうローカリティは、関係的で文脈依存的なものとしてのそれであり、アパデュライの用法に倣っている。台湾に既存の回民社会と、移住者である雲南回民との間で差異化され産出されるローカリティの問題を、本章では雲南国民の宗教実践としての「開齋節の挨拶回り」のなかで検討した。しかし、このようにして産出されるローカリティは、排他的なものではない。「開齋節の挨拶回り」は、外省人回民や外国人回民も参加可能なものであり、雲南国民のローカリティは外部に開かれてもいると結論付けた。

第6章においては、台湾に移住した雲南回民の「宗教」と「習俗」をめぐる議論をとおして、宗教とトランスナショナリズムの関係について論じた。1990年代以降、台湾の各清真寺には、ビルマやタイ出身の雲南回民宗務者が招聘されている。これは、国境を越えて構築されている、雲南回民のトランスナショナル・ネットワークを反映したものであった。台湾に移住した雲南回民にとって、言語や習慣を熟知したビルマやタイ出身の宗教知識人の存在は、重要な意味を持っている。しかし、実際の招聘は、台湾に既存の各清真寺の董事会が決定することになっており、そのため宗務者の招聘には、各清真寺の意向が反映される。つまり、宗教知のトランスナショナルな流動は、移民が居住するローカルな社会空間に規定されている。また、各清真寺は、中東イスラーム諸国に留学経験があり、イスラーム改革主義的志向を持つ宗務者を招聘する。イスラーム改革主義的傾向を持つ宗務者の流入は、雲南回民が従来有していた「中国の習俗」の改革を進めた。しかし一方で、雲南回民のコミュニティのつながりを強化するような宗教祭礼については、それを「中国の習俗」であるとする宗務者と、董事会などのコミュニティのリーダーとの間に認識上のずれを引き起こしていた。これまで宗教は、トランスナショナルな社会空間内部の結びつきを強化するものとして理解されてきた。しかし、トランスナショナルなネットワークをとおして流通する宗教知は、移民の間に亀裂を生み出すこともあることが理解できた。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、中国雲南省出身の回民（ムスリムの漢族）のトランスナショナルな移動に関する研究である。日中戦争、

国共内戦、台湾の経済発展と外交政策、ビルマに成立した社会主義政権の民族主義政策、タイにおける共産ゲリラの活動、およびトランスナショナルなイスラームのネットワークの形成など、20世紀のアジアで生じた歴史の変動を背景にして、雲南出身の回民とその子孫たちは、国境を越えて移動を続けてきた。本論文は、台湾に居住する雲南回民のあいだで丸2年以上かけて行った、綿密な人類学的フィールドワークの成果であるが、その射程は、彼らの移動ルートに位置する、中国、ビルマ、タイ、さらには中東にまで及んでいる。

本論文の第一の意義は、台湾の回民という、世界的にみてもごく少数の先行研究しかない対象に、日本の人類学者としてはじめて取り組んだ、本格的研究であるという点にある。第二の意義は、回民を、台湾という国家のレベルで閉じられたエスニック・宗教集団としてではなく、トランスナショナルに開かれたネットワークのなかで捉えるという、斬新な視点にある。

移民研究は、社会学におけるシカゴ学派にはじまる、伝統と蓄積のある研究領域である。初期の研究においては、移住先のホスト社会に、移民がいかに統合されていくかがテーマであった。近年のトランスナショナリズム研究においては、移住先と移住元の両方の国家にアイデンティティをもつ移動のあり方がテーマとなっている。本論文は、トランスナショナリズム研究は、初期の移民研究の発展形態ではあるが、いずれも近代の国民国家モデルの呪縛から解放されていないことを論じている。そこで、豊富な事例によって明らかにされるのは、ひとつ、あるいはふたつの国家とは結びつかない、多元的な関係性と帰属意識のあり方である。この点で、本論文は、従来の移民研究とトランスナショナリズム研究を批判的に展開したものと位置づけることができる。

本論文は、実証的な民族誌的データに基づき、雲南回民のトランスナショナルな関係性と帰属性を論証した、優れた研究であり、人類学以外の人文・社会科学の諸領域でも評価されるべき業績である。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判断する。